様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１日現在

機関番号：１３９０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０６０５００４

研究課題名（和文）　日本の産業博物館の現状と課題について

研究課題名（英文）　Current Conditions and Problems of Industrial Museums in Japan

研究代表者
武田　竜弥（TAKEDA TATSUYA）
名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：９０２５４１２７

研究成果の概要（和文）：研究期間中に1府14県の産業博物館候補91館（うち最終的に産業博物館と判断したもの62館）の実態調査を行った。またあわせて上記以外の郷土資料館、歴史博物館等77館、展示施設を持たない産業遺産74箇所を視察し、各地域の産業史および産業文化財について情報を得るとともに、関連の資料を収集した。個別の事例研究としては、産業観光における博物館の役割という観点から佐渡鉱山と石見銀山を比較し、産業観光を発展させる上で現在の佐渡が抱える問題点を明らかにするとともに、佐渡における産業観光の活性化策を提案した。

研究成果の概要（英文）：Industrial museums play an important role as core facilities for industrial tourism. But unfortunately there is not enough data about industrial museums in Japan because major surveys don't treat them as an independent category. For this reason we conducted original research about them and clarified current conditions and problems of 62 industrial museums in 15 Japanese Prefectures. In addition, as a case study, we analyzed the problems of *Sado* Mine from the viewpoint of visitors by comparison with *Iwami* Silver Mine which was registered as a World Heritage Site (UNESCO) in 2007 and proposed the plans to develop industrial tourism in *Sado*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：感性社会学
科研費の分科・細目：博物館学
キーワード：産業博物館、産業遺産、産業観光

１．研究開始当初の背景

現在、政府は観光立国の掛け声のもと、地域の観光資源の掘り起こしや広報・アクセス手段の改善など様々な施策を進めている。そうした中、わが国の特性を生かす新たな観光のあり方として注目を集めているのが、産業観光である。産業観光とは歴史的・文化的な価値を持つ工場やその遺構、機械・道具類、産業製品などを産業文化財と位置づけ、それに触れることを目的とする観光活動である。その形態は様々であるが、産業に関わる資料を系統的に収集・保管・展示する産業博物館はその中核となる存在である。

産業博物館は、実学的な意義が大きいとい

う点で他の博物館とは異なった特色を持つ。また科学技術は普遍的なものであるが、その発展形態やそれを用いる産業は地域によって多様な姿を取るので、そこには具体的な産業となって現れた地域の特性が集約的に表現されている。産業観光を推進していくうえで、産業博物館の果たすべき役割はきわめて大きいのである。

ところが一方でわが国の産業博物館の現状を見ると、そこには克服すべき課題が山積している。中でも問題なのは、各地にある産業博物館の実態を示す基礎的なデータベースが存在しないという点である。これは、一般に行われる博物館調査の分類に産業博物館という種別が欠けていることによる。そのため、本来であれば産業博物館というカテゴリーのもとで一括して扱える施設も、産業技術に関するものは科学博物館に、個々の企業活動に関わるものは企業博物館に、地域産業に関するものは郷土資料館などに振り分けられ、その実態あるいは整備に関する包括的な調査・研究が十分に進められてこなかったのである。

しかしながら、産業博物館の重要性は今後ますます大きくなると予想される。地域の産業について理解を深めるための施設の整備は、地域社会の一体化や他地域との交流を促進していくうえで重要な意味を持つ。また今日、若者の「理系離れ」が指摘され、ものづくりに対する関心が弱まりつつある中で、産業博物館は職業教育の場としても、ひいては中高年層の生涯教育の場としても大きな意義を持つ。そうした施設を効率よく整備していくためにも、産業博物館というカテゴリーのもとでの全国的な実態調査は喫件の課題といえる。

2．研究の目的

本研究は、これまで包括的な調査・研究が十分になされてこなかったわが国の産業博物館の現況について全国的な調査を行い、その実態を把握するとともに、調査結果の分析を通じて各館・各地域の問題点や改善策を明らかにし、産業博物館を通じた地域の活性化に寄与することを目的とする。

3．研究の方法

本研究の最大の特色は、これまで別々に扱われることの多かった様々な施設を「産業博物館」という横断的なカテゴリーのもとで一括し調査・研究することにある。その方法は以下の3つの段階からなる。

①産業博物館候補の選定

既述のように、わが国には産業博物館の現況に関する基礎的なデータベースが存在しない。そこで本研究ではまず、インターネットや関連の書籍、電話取材などによって産業博物館の候補となりうる施設を選定し、調査対象とする府県ごとにリストを作成した。

②各施設の実態調査

前項のリストに基づき、各施設の実態調査を行った。主な調査項目は、設置者、設立の経緯、展示内容、展示方法、運営方法、展示以外の活動、入館料、アクセスなどで、必要に応じて施設の職員や来場者への聞き取り調査も実施した。また本研究は産業観光との関係を重視しているので、当該施設周辺のその他の観光資源（必ずしも産業博物館には分類できない博物館等を含む）や展示施設を持たない産業遺産の調査も並行して行った。

③調査結果の分析

前項の調査結果を分析し、わが国の産業博物館の現況を調査対象とした府県ごとに取りまとめた。また各館・各地域の比較を通じて個々の博物館が抱える問題点を明らかにするとともに、地域の実情を踏まえた改善策を検討した。

4．研究成果

①調査結果の概要

研究期間中に1府14県の産業博物館候補91館について実態調査を行った。またあわせて上記以外の郷土資料館、歴史博物館等77館、展示施設を持たない産業遺産74箇所を視察し、各地域の産業史および産業文化財について情報を得るとともに、関連の資料を収集した。

表1

	自治体	企業	団体	計
山形県	1	4	2	7
新潟県	2	2	—	4
石川県	3	—	3	6
京都府	1	—	—	1
鳥取県	—	—	—	—
島根県	2	—	1	3
岡山県	2	1	1	4
山口県	2	1	—	3
徳島県	2	—	—	2
香川県	4	1	—	5
福岡県	8	8	1	17
佐賀県	1	1	1	3
長崎県	1	1	1	3
鹿児島県	—	2	—	2
沖縄県	1	1	—	2
計	30	22	10	62

調査対象とした産業博物館候補91館のうち、最終的に産業博物館とみなすことができたのは62館であった。判断の基準は、施設の主たる目的が一般公開を前提とした産業関連の資料の展示であること、専用の展示室を持つこと、常設の展示資料が十分にあるこ

との 3 点である。これら 62 館の設置者別の内訳は表 1 にまとめた通りである。

62 館のうち歴史的価値の高い建造物を展示館の建物として利用しているもの（その場所に設置することに大きな意味があるもの）は 21 館（34%）であった。また当該施設の建造物もしくは展示品が国の有形文化財に指定・登録されているものは 15 館、経済産業省の近代化産業遺産に認定されているものは 14 館、両者に指定・登録・認定されているものは 5 館であった。

なお筆者は所属機関から措置される研究費によっても同様の調査を実施しているが、本報告書ではその性格上、科研費によって調査を行ったものについてのみ記載した。

②佐渡の産業遺産と産業博物館

個別の事例研究としては、新潟県佐渡の産業遺産と産業博物館に関する研究を行った。佐渡に注目した理由は、第一に、佐渡がわが国でも有数の産業遺産の宝庫であること、第二に、それにもかかわらず佐渡においてはいまだ産業観光が十分に発展していないことによる。ここで比較の対象として取り上げたのが、島根県の石見銀山である。周知のように、石見銀山は 2007 年に登録名「石見銀山遺跡とその文化的景観」としてユネスコの世界遺産に登録され、以来わが国における産業観光の一大拠点へと成長してきた。県の観光動態調査によれば、石見銀山の 2007 年の観光客数は前年に比べ 78.4%の増加、有料施設の龍源寺間歩だけを取ると、実に 3.8 倍もの増加となったという。

後述するように、石見銀山と佐渡鉱山は当初よく似た発展経緯を辿った。また鉱山遺跡だけあってアクセスがあまりよくない（しかも冬季は大雪に見舞われる）という点でも、両者はほぼ同じ条件である。にもかかわらず、一方は世界遺産に登録され、多くの観光客を引きつけているのに対して、他方は豊富な産業遺産を持ちながら、それを十分に生かしきれていない状態にある。この違いは一体何に由来するのか。この疑問を解くため、筆者は佐渡と石見の現地調査を行い、従来型の博物館とエコミュージアムという二つの視点から両者の比較分析を行った。

1）産業遺産の差異

石見と佐渡は、銀山が発見されたのもほぼ同時期（16 世紀前半）であり、関ヶ原の戦い以降徳川氏の直轄地になったという点も、大久保長安が鉱山の発展に大きく寄与したという点も同じである。両者の違いは、佐渡では銀だけでなく金も産出したこと、最盛期が過ぎてからも金銀が枯渇しなかったことにある。

このことは、それぞれに残された産業遺産の違いにも反映されている。石見銀山は開山から 100 年ほどでほとんど銀を掘り尽くしてしまい、1675 年には奉行統治が代官統治に格下げ、明治に入って藤田組が再開発を試みるも採算が合わず、大正時代には休山するにいたった。つまり鉱山遺跡として見るならば、石見銀山の主要な遺跡はそのほとんどが江戸時代前半までのものなのである。

これに対して佐渡では、1618 年に代官が奉行に格上げされて以来、一貫してその地位を保ち、明治以降も政府や三菱の手で大規模な開発が続けられた。そのため、佐渡には江戸時代の遺跡ばかりでなく、明治から昭和にかけての近代化遺産も数多く残されることになった。産業遺産の幅広さという点から見た場合、佐渡は石見よりも優れた面を持つ。

2）産業博物館（従来型）

石見銀山には現在、本研究の定義する産業博物館が 3 つある。石見銀山資料館、町並み交流センター、石見銀山世界遺産センターである。（但し世界遺産センターは同銀山が世界遺産に登録された後に整備されたものなので、ここでは比較の対象としない。）

石見銀山資料館は、江戸時代に銀山領を支配した大森代官所の跡地にあり、表門と門長屋（1815 年建築）は国の史跡となっている。また建物には 1902 年に建てられた旧邇摩郡役所が使用され、中では銀山関連の古文書や道具類、鉱石標本などが展示されている。規模は大きくないが、石見銀山の概要を知るには打ってつけの施設である。

町並み交流センターは、この石見銀山資料館から徒歩で 10 分ほどのところにある。建物は 1890 年建築の旧大森区裁判所で、中では当時の法廷の様子が再現されているほか、銀山関連のビデオなどが視聴できるようになっている。これら 2 館はいずれも大森地区の旧道沿いにあるが、歴史的建造物がそのまま使われているので、周囲の景観を損なうことなく、建造物そのものの保全にも役立っている。

一方、佐渡に目を転じると、こちらには産業博物館と呼びうる施設が 2 つある。「史跡佐渡金山」内の鉱山資料館と相川郷土博物館である。しかしその展示内容や設置形態を石見のそれと比較すると、佐渡は大きく後れを取っているといわざるをえない。（復元された「佐渡奉行所」内でも金鉱石の選鉱工程に関する展示が行われているが、この施設そのものを産業博物館とみなすことは難しい。）

まず鉱山資料館であるが、これはそもそも「史跡佐渡金山」の付属資料館なので、この施設の「宗太夫坑コース」に参加しなければ見学することができず、展示内容もこのコースがテーマとする江戸時代のものに特化している。また相川郷土博物館は、建物に歴史的建造物（旧宮内省御料局佐渡支庁鉱山事務所）を使っている点、展示が鉱山全般に及ぶ

点で石見銀山資料館に似ているが、残念ながらその展示は洗練されているとはいいがたい。つまり佐渡には、観光の拠点となりうるような産業博物館が存在しないのである。

先に指摘したように、佐渡鉱山の歴史は石見銀山よりも長く、残された産業遺産も膨大である。それゆえ予備知識の少ない一般の観光客がその全体像を把握するには、拠点となる産業博物館がぜひとも必要となる。にもかかわらず、佐渡には現在までのところ、それに値する施設がない。これは産業観光の振興という面から見て、大きなマイナス要因といわざるをえない。

3）エコミュージアム

石見銀山の主たる観光区域は、かつて鉱山町のあった大森地区と銀の採掘が行われた銀山地区の2つからなる。両者の間には旧道が通じており、その両端に石見銀山資料館と龍源寺間歩（見学可能な江戸時代の坑道）がある。観光客の大半はこの旧道を徒歩で移動することになるが、ここには近世の鉱山町の佇まいを伝える伝統的な家屋や町並みが良好な状態で残されている。大森町ではこの景観を守るため、古い家屋を修復する際には町から補助金を出すなどして、可能なかぎり元の形状を維持もしくは復元するよう努めている。また自治体だけでなく、地元住民もこの景観保持に一役買っており、たとえば大森町の有力商家であった熊谷家の旧宅（国重要文化財）の修復・保全には、地元の主婦たちのグループが参加している．さらに一般の家屋だけでなく、自動販売機や店舗などにも景観保持のための工夫が見られ、いわばこの町並みそのものが生活文化財として大きな価値を有している。

この旧道とともに観光客の移動線として重要な役割を果たしているのが、銀山公園と龍源寺間歩の手前とを結ぶ遊歩道である．こちらは自然に親しみながら石見の旧跡を巡ることのできるコースで、途中には藤田組が1895年に建設した清水谷製錬所の遺構も見られる。石見に残る数少ない近代化遺産の一つである。この遊歩道が整備されたおかげで、銀山公園と龍源寺間歩との間は往路と復路で別の道を辿ることが可能となり、石見の魅力をより重層的に味わえるようになった。

以上のように、石見においては地元の自治体や住民の積極的な関与のもと、産業遺産と伝統的な町並みと自然が一体化した観光空間が作り上げられている。

これに対して佐渡の方はどうかというと、現状ではこちらの面でも佐渡は石見の後塵を拝しているように思われる。ともに大久保長安が基礎を築いただけあって、町の骨格はよく似ているのだが、その保存状況などが石見とは大きく異なるのである。これには歴史的な経緯が関わっている。

もともと江戸初期に相川に開かれた鉱山町は、道遊の割戸の南側の山中、上相川と呼ばれるところにあった。1603年に佐渡代官となった長安は、物資の搬入を行う港（大間港）を見下ろす台地に陣屋（のちの奉行所）を築き、この陣屋と上相川を結ぶ街道（旧道）を整備して鉱山の支配を行うこととした。石見の例でいえば、上相川が銀山地区、陣屋周辺の旧道沿いが大森地区にあたることになる。ところがこの上相川は、産金量の減少とともに江戸後期には衰退してしまい、明治以降の開発はその西側の新道沿いで進められた。現在の上相川は人家もない藪の中の廃墟で、遊歩道の整備も進んでいないので、一般の観光客は容易に近づくことすらできない。つまり佐渡においては、その発祥の地となる鉱山町がそもそも観光ルートから外れているのである．

また残された旧道沿いを見ても、その様相は石見とは大きく異なる。たしかに町の骨格は当時のままだし、京町や大工町など往時を偲ばせる地名も残ってはいるが、伝統的な家屋や町並みを保存する取り組みなどが積極的になされてきたわけではないので、一般の生活空間と変わらない状態となっているのである。もちろんこれは地元住民の意識が石見に比べて低かったということではない。佐渡では近年まで金の生産が行われていたため、それに応じて再開発が行われてきたのである。

このことは、明治以降に開発の中心となった新道沿いを見ると、さらによくわかる。なにしろ1989年まで操業が続けられたのである。主要な道路はすべて大型作業車が通れるように整備・拡張され、邪魔なものは次々とスクラップにされていった。結果として佐渡には豊富な近代化遺産が残されることになったものの、その遺産はあくまで遺産に留まり、現在の地域の生活からは切り離されたものとなってしまった。これでは、住民の主体的な参加のもと地域全体を博物館として機能させるエコミュージアムの考え方は適用できない。

4）佐渡における産業観光の活性化策

相川の鉱山跡を軸とした佐渡の産業観光の活性化策を考えた場合、そこには2種類のアプローチの仕方があると思われる。その第一は佐渡鉱山単体での活性化策、第二は他の地域の産業遺産と組み合わせた広域での活性化策である。

このうち第一のものについては、先に指摘した問題点を一つひとつ解決していくことで対応が図られよう。中でも急務なのが、拠点となる産業博物館の整備である。400年近くに及ぶ佐渡鉱山の歴史や残された産業遺産の価値を多くの観光客に知ってもらうには、全体を俯瞰できる博物館の存在が不可欠

である。設置場所は、近代化遺産が数多くあり、相川郷土博物館や佐渡奉行所にも隣接する北沢地区が理想であろう。

さらにエコミュージアムという点から強調しておきたいのが、地元住民の積極的な関与である。現在の佐渡鉱山では、産業遺産の多くが「史跡佐渡金山」を経営する㈱ゴールデン佐渡の管理下にあり、産業観光と地域の生活とが必ずしも有機的に結びついていない。このままでは佐渡鉱山の地域としての魅力をより多くの観光客にアピールすることは難しいだろう。重要なのは、そこに住む人々が主体となって地域の遺産を守り育てるという姿勢である。いわば企業の私的財産を地域の共同財産へと転化する工夫が必要なのである。

第二の、広域での活性化策に関しては、島の南部にある小木・宿根木の産業遺産との組み合わせが有望であろう。小木は 1606 年に大久保長安によって番所が設置されて以来、佐渡の金銀の積出港として発展した町である。1672 年に河村瑞賢が西廻り航路を開いた際には、全国の主な寄港地 8 港の中にも選ばれ、明治半ばに至るまで北前船で賑わった。現在でも小木には、往時を髣髴とさせる町並みが残されているほか、北前船の活躍を紹介する海運資料館などの施設がある。

一方、小木の西隣にあたる宿根木は、北前船の造船・修理に従事した船大工や鍛冶屋などが集積していた村である。宿根木は明治以降ほとんど再開発が行われなかったことから、現在でも往時の家屋や町並みがそのまま残っており、新潟県で唯一国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。また近くには、旧宿根木小学校の校舎を利用した佐渡国小木民俗博物館という施設があり、国の重要有形民俗文化財にもなっている船大工道具や漁労用具を見学することができる。

これら小木・宿根木の産業遺産を相川の鉱山遺跡と組み合わせれば、佐渡の産業文化の特徴や魅力をより強くアピールすることができるだろう。さらに両者の間には、歴史的に相川の金銀山に先行する鶴子銀山、西三川砂金山などの鉱山遺跡が残されているほか、八幡には博物館としては佐渡で唯一財団法人化されている佐渡博物館がある。これらをうまく連携させることによって、一層の相乗効果が期待できるはずである。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①武田竜弥、佐渡の産業遺産と産業博物館―石見銀山との比較から、日本感性工学会論文誌、査読有、9 巻 2 号、2010、pp. 465-474

②武田竜弥、日本の産業博物館の現状と課題―産業観光による地域活性化の視点から、日本感性工学会論文誌、査読有、8 巻 4 号、2009、pp. 1179-1184

〔学会発表〕（計３件）

①武田竜弥、福岡県の産業博物館、日本感性工学会感性社会学研究部会春季研究発表会、2011 年 3 月 5 日、名古屋工業大学

②武田竜弥、佐渡の産業遺産と産業博物館、日本感性工学会第 11 回大会、2009 年 9 月 9 日、芝浦工業大学

③武田竜弥、佐渡の産業遺産と産業博物館について、日本感性工学会感性社会学研究部会冬季研究発表会、2008 年 11 月 29 日、静岡大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

武田　竜弥（TAKEDA TATSUYA）

名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：９０２５４１２７

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：